

## 3

## 肺胞上皮系腺癌細胞にみられる核内封入体の超微形態

(霞ヶ浦・病理部)  
草間 博, 福島良明, 国府田 務  
(同・呼吸器科)  
滝沢延彦, 佐藤昭俊

多数の腫瘍細胞に核内封入体を認めた末梢型肺乳頭腺癌の一例を経験し、電顕的検索を行ったので報告する。

〔症例〕54歳・女性。肺腺癌の診断にて左肺下葉切除術が施行された。腫瘍は1.4×1.0 cm大の境界比較的明瞭な腫瘍で中心部の線維化はごく軽度。胸膜や断端浸潤はなく、肺内転移やリンパ節転移も認められなかった(pT1N0M0)。

〔光顕所見〕腫瘍細胞は中型低円柱状で乳頭状に増殖し、とくに周辺部では肺胞壁にそった進展を示した。胞体はやや泡沫状で、類円形の核内には弱好酸性の封入体が通常一個認められ、核小体が辺縁に圧排される像もみられた。この封入体は腫瘍細胞の約半数に認められ、とくに腫瘍中心部に多かった。なお、術前の穿刺吸引細胞像でも多数の封入体が認められた。

〔電顕所見〕腫瘍細胞の多くは微絨毛を有して管腔側胞体内にはオスミウム好性の層状構造物がみられ、Ⅱ型肺胞上皮細胞への分化を示した。核内封入体は径40～70 nmの単位膜からなる分枝した管状構造の集合からなり、全体としては膜に囲まれていなかった。管状構造の一部は嚢状に拡張し、電子密度の高い顆粒状物質を入れた所もみられた。また、この管状構造と核内膜との連続性を示唆する所見も認められた。少数ではあるが核膜の湾入に由来する偽封入体もみられ、その一部は管状構造と併存していた。

〔考察〕管状構造の集合からなる核内封入体は核内膜の管状湾入によるものと推測され、肺胞上皮癌(Ⅱ型肺胞上皮あるいはClara細胞類似の腫瘍細胞)及び肺線維化巣における過形成性肺胞上皮細胞に多く認められることから、肺胞表面活性物質の生成異常や核・細胞質の流通促進などとの関連が示唆されるが、正確な意義は不明である。

本研究は東京医大がん研究事業団の助成(平成2年度)を受けた。

## 4

## 実験的抗カルジオリピン症候群(ACLS)作製の試み

佐藤進一郎, 下 邦明, 佐々 弘\*,  
鈴木達男  
(血清学)、(病理学第二)\*

近年、結合組織病でBFP、血栓、血小板減少、神経症状を呈するACLSの併発が注目されている。本症の病因解明のため、我々はウサギに動物実験モデルの作製を企てた。

梅毒脂質抗原と梅毒患者血清とを比率を変えて混合して作製した抗原過剰、最適比、抗体過剰の3種類の免疫複合体(IC)、または同種動物の肝臓から分離した粗ミトコンドリア分画(Mt)をウサギに週1回、前者は静脈内に、後者はアジュバントと共に筋肉内に投与し、10～25週間の抗CL抗体価、体重変動、血液学的、生化学的検査、および組織学的検索を行った。

その結果、抗原過剰、最適比、抗体過剰ICおよびMtのいずれで免疫しても14例全例に抗CL抗体が産生され、IC投与群はMt投与群よりも早期にピークに達し、高い抗体価を示した。対照群では抗体産生は認められなかった。体重の変動はIC投与群では対照群と同様な推移を示したが、Mt投与群では著明な減少傾向が観察された。血液学的検査では対照群に比べ赤血球数および白血球数には変化は認められなかったが、血小板数は一過性の増加傾向の後、抗CL抗体の産生時期に一致して減少を示した。生化学的検査では特に有意の変化は認められなかった。剖検時の肉眼的所見ではMt投与群の1/3に心嚢液5mlの貯留と肺表面に白色の小結節を認めたが、血栓、塞栓などの所見は示さなかった。組織学的には最適比IC投与群の1/4、抗原過剰IC投与群の3/3、Mt投与群の2/3で、心筋内に単核球、リンパ球の浸潤および心筋壊死が観察された。抗原過剰IC投与群の2/3、Mt投与群の2/3で肝組織内への細胞浸潤、肝細胞破壊の所見が認められた。その他Mt投与群では2/3に肺、腎、脾に病変が観察された。